

# 令和2年度南紀支援学校 第2回運営協議会報告

演題番号 第5分科会  
5-16 「子どもたちの可能性を広げる水泳指導を目指して」  
～子どもたちの気づきと教員の意識の変化～  
和歌山県立南紀支援学校 実習助手 栗山 光美

在学児童・生徒の障害状況 (令和2年度)

【全校児童・生徒数26名】  
○小学部8名  
○中学部9名  
○高等部9名  
○医療的ケアが必要な児童生徒9名  
\*経管栄養法(胃瘻)、吸引、導尿、カテーテル、人工呼吸器の使用など多岐に渡る。  
○重症度障害率96.1%  
\*運動機能だけでなく、言語・聴覚・視覚・知能など、様々な障害を重複していることが多い。  
○入水の維持率88.4%  
\*自立歩行が出来ない、座位が不安定、自立歩行が出来ない、実用的な歩行困難のた物理的障として利用しているなどにより、維持率が低くなっている。

【以前のプール活動】  
●プールに入ることが目的  
\*特に姿勢保持や自由に身体を動かすことが出来る活動の多い子どもたちは、プールに入ることが目的となる活動になっていた。  
●プールに入らなかった子どもたちを要することが目的  
\*姿勢保持や身体を部分別に動かすことの出来る子どもたちは、水と自由に関わる姿を見守ることが目的となる活動になっていた。

【教員の葛藤】  
●障害の重い子どもたちと、具体的な水中でのような取り組みを行えば良いのか...  
●屋外プールは気温や水温、天気によって適正条件が定まらるので、子どもたちに負担にならないか心配...

【対症】  
○「水」の特性を知る  
○「水」の特性を活かした様々な「ねらい」と「子どもたちに期待すること」を明確にすること  
○具体的な水泳指導方法を熟知すること  
○「ねらい」と「期待すること」に合わせた水泳指導方法を選択すること  
○水泳指導方法を実践する技量を身につけること  
○子どもたちの気づきを体感すること

【研修(実技指導含む)の必要性】  
日常生活での配慮に加え、水中での配達が必要となり、プールに入るだけで難一杯になってしまう  
正確、自由に水と関わる事を求めているなら、見守るだけでも良いのでは...

取り組み1/研修の実施→教員の意識改革→実践力の向上→プール水泳指導としての意識の定着

【実りの大樹】  
○研修を踏んで研修内容(実技指導含む)を充実させ、2014年～2019年まで継続して取り組んできた。

【取り組みの一環紹介】  
●研修や日々の実践に活用するツールとして、プール水泳指導専門研修「資料(冊子)」を作成し、全職員に配布した。  
●「水」の特性や有効活用方法、最新の「ねらい」におけるねらいの持ち方や具体的な水泳指導方法を紹介した。

【研修内容の一環紹介】  
○前年度取り組んだ記録運動の振り返り  
\*キーポイントの紹介を通して、実技内容の振り返りを行うと共に新任教員などへプール水泳指導のイメージの構築を行った。  
○プール水泳指導のシミュレーション  
\*組立演習・生徒に指導する「ねらい」と「期待すること」を明確にし、どのような取り組みを具体的にに行うか、ワークシートに記入した内容を全校教員で共有する場を設けた。  
\*ワークシート記入例  
○①に対して一歩進めると、  
\*下肢関節可動域の拡大と下肢操作性の向上に期待して、スイングドリフティング、水中移動歩行に取り組む

【実技支援内容の一環紹介】  
●専門員となる実習助手(理学療法士)による支援  
○補助具を使用しない実技指導  
\*教員と子ども両者の両者が、バランスを崩さず姿勢を保持する感覚をお互いに高めると、あえて補助具を使用しない実技指導を行った。  
○補助具を使用した実技指導  
\*主体的な活動を引き出す方法として、補助具を活用した実技指導を行った。

【教員の意識の変化】  
2017年(平成29年) 全職員研修として「プール水泳指導専門研修」を開催  
2018年(平成30年) 研修で引継いだ内容を職員研修  
2019年(平成31年) 「水」は水泳指導専門研修で活用

【子どもの気づき】  
●同じ姿勢でも、身体に感じる重さや風が違った。  
●水が引ける感覚や、水流の強弱によって自身の慣れ具合が異なる変化を察知することが出来た。  
●驚きや怖さを感じ、いつもより自由な動きが止まるとは想像出来なかった。  
●身体に起こった変化を受け止めることが、自身の身体を知る事となり、新たな可能性を感じる機会になった。  
○来年も可能な限り継続したい。

【担任の気づき】  
○生徒が水中で感じ取った感覚や前向きな気持ちの変化を、肌で体感することが出来た。  
○障害が重くても、できることが沢山あることに気付いてもらう為に、プール水泳指導として何が出来るのかを追求する実践が芽生えた。

【水泳指導の様子】  
○重さや水中で実らされた感覚差等の感覚の違いを、担任と確認し合った。  
○身体の前傾に慣れさせたり、大小の浮き輪等の水流を作って感覚を刺激した。  
○浮力と補助具を利用して水面に深く環境を作り、前方から理学療法士の支援を得ながら、後方から担任がスイングドリフティングを行った。  
○浮力が高まった状態で、上肢の随意的な動きを行った。

取り組み2/重度身体障害を呈する生徒の挑戦→『生徒の気づき』と『教員の意識の変化』

【入水の様子】  
○中高合同のプール水泳の時間、たくさんの生徒と教員が見守る中、プールのスロープをシャワーチェアで移動した。  
○生徒の姿勢は変わらず、それぞれの役割を担う職員や学校医・理学療法士も緊張感が漂っていた。  
○事前に練習し入りハーサルを行ってきた結果方法により、予定通り無事入水することができ、ようやくプール入りが笑顔に包まれた。

【水泳指導の様子】  
○重さや水中で実らされた感覚差等の感覚の違いを、担任と確認し合った。  
○身体の前傾に慣れさせたり、大小の浮き輪等の水流を作って感覚を刺激した。  
○浮力と補助具を利用して水面に深く環境を作り、前方から理学療法士の支援を得ながら、後方から担任がスイングドリフティングを行った。  
○浮力が高まった状態で、上肢の随意的な動きを行った。

【生徒の気づき】  
●同じ姿勢でも、身体に感じる重さや風が違った。  
●水が引ける感覚や、水流の強弱によって自身の慣れ具合が異なる変化を察知することが出来た。  
●驚きや怖さを感じ、いつもより自由な動きが止まるとは想像出来なかった。  
●身体に起こった変化を受け止めることが、自身の身体を知る事となり、新たな可能性を感じる機会になった。  
○来年も可能な限り継続したい。

【担任の気づき】  
○生徒が水中で感じ取った感覚や前向きな気持ちの変化を、肌で体感することが出来た。  
○障害が重くても、できることが沢山あることに気付いてもらう為に、プール水泳指導として何が出来るのかを追求する実践が芽生えた。

【水泳指導の様子】  
○重さや水中で実らされた感覚差等の感覚の違いを、担任と確認し合った。  
○身体の前傾に慣れさせたり、大小の浮き輪等の水流を作って感覚を刺激した。  
○浮力と補助具を利用して水面に深く環境を作り、前方から理学療法士の支援を得ながら、後方から担任がスイングドリフティングを行った。  
○浮力が高まった状態で、上肢の随意的な動きを行った。

まとめ 今後の課題

【教員の多くが、期間の限定された屋外プール水泳といった学習環境に大きな付加価値をつけて取り組めるようになってきた。  
●プール水泳指導における「ねらい」と「子どもたちに期待すること」を明確にすることで、具体的な指導方法を選択し計画的に取り組めるようになってきた。  
●教員の技量が蓄積され、自信を持って子どもたちと関わるようになってきた。  
●子どもたちが、「水」と関わる中で心地良さや身体に起こる変化に気づく様子を教員が体感することで、学校全体におけるプール水泳指導に対する関心が高まった。

【本校を取り巻く環境の変化】  
●隣接する短期教育福祉校との統合に向けて、今年度より本校敷地内に新校舎建設が開始されている。既存の施設については壊滅状態を遂げており、屋外プールについては解体済みでプール水泳を行う事が出来なかった。代替手段として近隣施設内へプール水泳を予定していたが、コロナ禍の影響で実現できず、統合校予定が令和5年度、温泉水プールを建設する事になっている。  
【今後の課題】  
●これまで継続してきた研修(実技指導含む)を、どのような形で継続していくか。  
●プール水泳指導に対する関心の高まりをどう活かすか、どのように継続していくか。  
●統合後のプール水泳指導のあり方を、どのように準備していくか。

1 日時 令和2年12月17日(木) 10:00~12:00  
2 場所 岩田公民館 会議室  
3 内容 (1)開会  
(2)本校の取組発表  
「子どもたちの可能性を広げる水泳指導を目指して」  
～子どもたちの気づきと教員の意識の変化～  
(3)意見交換

意見交換より

- 水を嫌いな子どももいるが、多くの子どもは好きである。水を嫌いな子どもには、無理には水に入れていない。
- 統合校では、新校舎に水治療室ができる。屋内なので重度の障害のある方でも利用しやすくなる。
- 現在、南紀医療福祉センターにも屋内にプールがあるので、日程調整し、利用してください。

等